

狛江の原始・古代の住まい I

平成13年3月30日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

私たちの日々の生活の主要な場である住まい（住居）は、永い間の自然環境や生活様式の変化に応じ、また技術の進歩や社会構造の発展によって、その形を変化させてきました。それはつねに、安全で快適な生活を求めつづけた祖先たちの、試行錯誤の跡であったともいえるでしょう。今回は、このような住居の変遷を、各時代をおってみてゆきながら、狛江市内のそれぞれの時期の遺跡についても紹介してみたいと思います。

I 旧石器時代の住まい

今から約13000年以上前の旧石器時代の人々は、獲物を求めて移動する狩猟・漁労・採集を主体とした生活を営み、洞窟や岩陰に身をよせてくらしていたと考えられています。このため、これまでは竪穴式住居跡のような明確な住居の痕跡は発見されませんでした。狛江市内でもこの時代の遺跡は若干認められ、数点の石器が出土していますが、住居跡は発見されていません。ところが近年、神奈川県相模原市田奈向原遺跡で、約15000年前の、直径10mで柱穴や炉址を伴う住居跡（明確な竪穴状の掘り込みは認められないが）の可能性が考えられる遺構が検出されました。

II 縄文時代の住まい

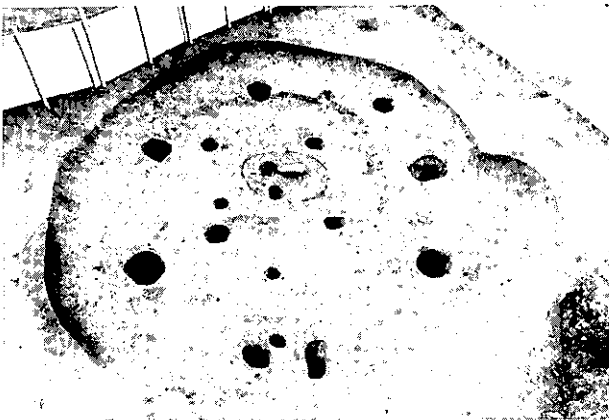
縄文時代は約13000年前から2300年前頃にあたる時代で、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つの時期に区分されます。縄文時代になっても草創期の段階はまだ明確な住居跡はほとんど発見されていませんが、東京都あきる野市前田耕地遺跡において、やや浅いながらも直径3mほどの不整円形に掘り込まれた、炉址を伴う竪穴式住居跡と考えられるものが検出されています。一般的に明確な竪穴式住居跡が検出されるようになるのは縄文時代早期頃からですが、現在までのところ狛江市内で最古の竪穴式住居跡は、寺前東遺跡で2軒検出されているものです。縄文時代前期に相当するこれらの住居跡は、直径3.5mと5mの規模で、ほぼ円形の皿状に掘り込まれ、中央部付近に炉址が、その周辺に柱穴が認められました。

縄文時代前期になると、技術の進歩や、早期末頃からつづいた気候の温暖化によって、食糧の安定的供給が可能となり、定住化がすすみ、湧き水を囲んだ台地上などに集落を営むようになります（近年、鹿児島県上野原遺跡等で縄文時代早期の集落跡が発見されつつありますが、全国的に一般化するのには縄文時代前期頃からのようです）。このような集落は、縄文時代中期に入ると更に大きく発展します。こうした大規模な集落跡は狛江市内では弁財天池遺跡で確認されていますが、ここで検出されている住居跡の多くは、直径5～6mの規模をもつほぼ円形の竪穴式住居跡で、深く急斜に掘り込まれた壁と、その内側に廻る壁溝が明確に認められるものでした。一般にこの時期の住居は、炉址がやや片側に寄り、これと逆側に入口施設が設置されるようになり、炉址の形態も石囲いや埋設土器を伴うものなどが認められるようになります。柱穴も太い主柱穴が規則的に配置される傾向が認められます。また、この時期の大規模な集落跡からは、まれに直径10mをこえる大型の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡（住居跡であるか否かは不明だが富山県桜町遺跡等で検出されている）が検出されることがあります。

縄文時代中期末から後期前半になると、関東地方から東北地方南部を中心に、入口施設が細長く張り出した柄鏡形住居跡や、床面に比較的扁平な石を敷きならべた敷石住居跡といった、特異な形態の住居跡が現れるようになります。また、これらの住居跡には、張り出した入口部の先端に埋設土器が設置されたり、立石が立てられるなど、祭祀的な様相を示す施設がしばしば認められます。このような住居跡は狛江市内では、弁財天池遺跡や和泉駄倉遺跡で検出されています。

縄文時代後期中葉から晩期の住居跡は、比較的発見例が少ないのですが、一時的に方形プランを呈するものが出現するようです。狛江市内では埴上遺跡で検出（後期1軒、晩期1軒）されていますが、石棒・石剣・石版・土偶・土製勾玉等の祭祀・呪術用具が出土しています。

これらのことは、縄文時代中期末頃からはじまった、気候の冷涼化やあいつぐ火山の噴火等に伴う、生活環境の悪化に対する不安感からくる、信仰の新たな展開のあらわれによるものとも考えられます。



縄文時代中期前半の住居跡（弁財天池遺跡）



縄文時代中期中頃の石囲い炉をもつ住居跡
（弁財天池遺跡）



縄文時代中期末頃の柄鏡形敷石住居跡
（弁財天池遺跡）



縄文時代中期末から後期初め頃の
柄鏡形住居跡（和泉駄倉遺跡）

狛江の原始・古代の住まいⅡ

平成13年3月30日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1 1 1 1

Ⅲ 弥生時代の住まい

紀元前3世紀頃になると、中国大陆から朝鮮半島を経て、稲作農耕と金属器を伴う先進的な文化が北部九州に伝えられます。これが弥生時代のはじまりです。この文化は、その後わずか1世紀程で西日本一帯に、更に半世紀程で関東・東北地方にまで波及します。この時代は、稲作を基礎とした農耕社会が成立した時代で、人々は共同体を形成し、集団で大規模な農作業を行うようになります。このような社会では、生産物（米）の備蓄が可能となったことにより貧富の差が生れ、共同労働の際の指導者と一般の人々との格差も生じてきます。そして、これらの指導者たちは、大規模な環濠集落（防衛のための堀を周囲にめぐらせた集落）をつくり、互いに争い、更に他の集落を統合するかたちで小国家を形成してゆきます。佐賀県吉野ヶ里遺跡はこのような環濠集落の一例です。

この時代には、収穫した穀物を貯蔵するための高床式倉庫や指導者たちの住居と考えられる、掘立柱建物が存在し、物見台とも考えられる楼閣状の建物も出現したと推定されますが、一般の竪穴式住居も縄文時代の多数の柱穴をもつ円形プランのものから、規格性のある四本柱穴を基調とする小判形や隅丸方形の住居へと変りました。しかし、これらの住居跡のなかでもその規模には明確な格差があったようで、なかには一辺10m以上で複数の炉址をもつ大型住居跡も検出されます。このような住居跡は狛江市内では、古屋敷・相之原遺跡や矢崎山遺跡、和泉駄倉遺跡で検出されています。

Ⅳ 古墳時代の住まい

巨大な前方後円墳に代表されるこの時代は、3世紀末から7世紀末頃にあたり、日本が国家統一へと進んでゆく時代でもあります。

この時代の住居はその多くが竪穴式住居ですが、有力な豪族たちは、大型の高床式構造の掘立柱建物を主体とする居館に居住していたと考えられます。また、平地式住居の存在も認められます。このことは、各地の古墳から出土する家形埴輪や、奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡の文様などからもうかがうことができます。

竪穴式住居は、その平面形が隅丸方形から方形へと変化し、古墳時代後期前半（6世紀代）頃になると、それまでの炉址にかわって、最新式の暖房・調理施設であったカマドが、壁際に構築されるようになります。その他の建物としては、高床式の倉庫や、平地式の家畜小屋と推定されるものも確認されていますが、群馬県黒井峯遺跡では、この時期のムラの跡が火山灰に密封された状態で発見されています。

狛江市内ではこの時代の住居跡は比較的多く認められ、小足立前原南遺跡、箕和遺跡、箕和田・北久保遺跡、原北遺跡、和泉遺跡、橋場遺跡、経塚遺跡、弁財天池遺跡、田中・寺前遺跡、和泉駄倉遺跡、古屋敷・相之原遺跡等で検出されています。これらの住居跡のなかには、カマドを数回造りかえたり、何度かの拡張を行ったりして、かなり長期間にわたって居住した例も多数見うけられます。

V 奈良・平安時代の住まい

8世紀に入り国家統一が成り、天皇と貴族による中央集権の律令体制が確立すると、都には宮廷が、地方には国府や郡衙が置かれるようになります。更に仏教の普及のために各地に国分寺・国分尼寺といった寺院が建立されます。これらの施設の主要な建物は、瓦葺きで基壇や礎石をもった豪壮な建物や、掘立柱建物ですが、実はこの時代になっても関東地方では一般庶民の住居は、まだその大半が竪穴式住居だったようです。この時代には、都市が成立し、社会や技術の発達により、生産活動が多様化し、瓦や土器ばかりでなく、金属製品の生産などの生業がこれまで以上に大規模に行われるようになったようで、その工房跡やこれに従事した人々の住居跡と考えられる遺構が、近年各地で発見されるようになりました。

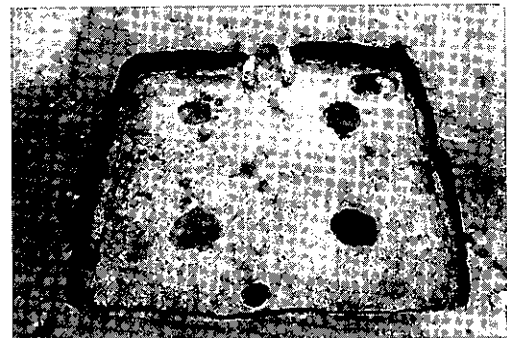
この時代の住居跡は、狛江市内では他の時代のものに比べて圧倒的に多く、箕和遺跡、箕和田・北久保遺跡、小足立中村北遺跡、小足立中村南遺跡、三長西遺跡、三長東遺跡、古屋敷・相之原遺跡、寺前東遺跡、久保・前原遺跡、田中・寺前遺跡、弁財天池遺跡、和泉駄倉遺跡、経塚遺跡、松原東遺跡等で検出されていますが、寺前東遺跡、久保・前原遺跡、田中・寺前遺跡、弁財天池遺跡、和泉駄倉遺跡、経塚遺跡、松原東遺跡では、掘立柱建物跡も検出されています。また、特に久保・前原遺跡では、長軸10m前後の大型住居跡が掘立柱建物跡とセットになるような状態で検出され、^{かんざし}鍔帯（貴族や官人たちが装着していた帯飾り）や分銅秤と推定されるものをはじめとする多くの鉄製品が出土し、弁財天池遺跡や松原東遺跡でも、鉄製紡錘車（回転させて糸を紡ぐための道具で特に鉄製のものは絹糸を紡ぐのに使用されたと推定される）をはじめとする多くの鉄製品が出土しました。

これまでみてきたような、縄文時代以来営々とつくりつづけられてきた竪穴式住居は、西日本では7世紀後半頃に、他の地域でも11世紀末頃には、まったく姿を消し、現在もみられるような、高床式や平地式構造の住居へと変わってきます。そして時代は古代から中世へと移ってゆきます。

こうして、原始・古代の住居の変遷を概観してきますと、そのほとんどの時代にわたって、一般庶民の住まいは竪穴式住居であったことがわかります。女王卑弥呼の時代の人々も、巨大な古墳の築造や都の宮殿の造営に従事した人々も、その多くは竪穴式住居に住んでいたわけです。しかし、このような竪穴式住居も、各時代をおって、規格性のある四本柱構造や方形を基調にした平面プラン、壁やカマドの出現と、その形態や構造をより新しいものへと徐々に進歩させていったことがわかります。そして一方で、古墳時代頃から本格的に普及する高床式住居と融合して、近現代の住居へとつながってゆくのです。ですからこうした意味で竪穴式住居跡は、構造的にも歴史的にも、私たちの祖先が大地に掘り込んだ住まいの基礎であるといえることができるでしょう。



弥生時代後期の大型住居跡（矢崎山遺跡）



古墳時代後期のカマドをもつ住居跡（経塚遺跡）